

国内およびアジア諸国に向けた 中小型の農業機械を充実させ 農業分野での躍進を目指す

株式会社 IHI アグリテック
代表取締役社長

宮原 薫



2017年10月、農業機械を手掛けるIHIスターと芝刈り機など小型原動機を製造するIHIシバウラを統合し、IHIアグリテックが始動しました。国内の農業構造の変化、世界的には食の安全保障への希求など農業はまだまだ成長産業です。これらを背景に旧2社の歴史と得意分野を大切にしつつ、シナジー創出を目指しています。

相互補完する2社を事業統合

2017年10月、北海道千歳市を拠点とする株式会社IHIスター（スター）と長野県松本市の株式会社IHIシバウラ（シバウラ）を事業統合し、株式会社IHIアグリテックとなりました。スターはトラクターに接続して使う農機具、例えば草刈り機や牧草を集めてロールにするロールベアなどの製造を手掛けてきました。一方のシバウラは、芝地管理用の乗用草刈り機などを製造しています。これまで作業機（implement）と自走機械（vehicle）の会社が分かれていたのですが、相互補完する意味でも2社を統合し、IHIアグリテック1社で農機・小型原動機SBU（Strategic Business Unit：戦略的事業単位）として国内外の農業分野での成長を目指してまいります。

当面の課題は、旧2社それぞれの強みを活かしてシナジー効果を生み出すことです。例えば、シバウラ

はゴルフ場を中心に都市部のチャンネルをもっています。ゴルフ場は都市部に多い。都市部では、実は河川の土手の草刈り、飛行場の草地の整備などの需要があります。そこではゴルフ場や運動場の芝地管理のような「何ミリに刈りそろえる」といった繊細さは必要ありませんが、スターのもつ牧草刈り機構や刈った草をまとめてロールにする機構をもつ機械に活躍の場があるかもしれません。逆に、スターの守備範囲に多い休耕田の草刈りに、シバウラの製品である堤防やゴルフ場の草刈り作業用の機械が応用できるでしょう。このようにみても、それぞれの技術やお客さまをクロスオーバーさせることで意外なところに商機が見つかるのです。IHIアグリテックは、これまでのお客さまとの信頼を維持していくため、ブランドとしてのSTAR（製品のシンボルカラーは緑）とSHIBAURA（同赤）は引き続き使用していきます。

千歳、松本それぞれの強みを活かす

工場もそれぞれの得意分野があります。千歳工場は周辺に牧草地が広がる環境で、農家の方々とのつながりも深い。量産品というよりも、土を耕す、肥料をまく、牧草を刈る、集める、梱包するといったさまざまな作業機という、どちらかといえば多品種少量生産の得意な工場です。それだけに、微調整や必要なサービスに関して、専門の技術者がお客さまごとにきめ細かく行ってきました。松本工場はトラクター、エンジンを中心に量産品製造を得意とし、鋳造設備も保持しており、要素技術の幅が広いことに強みがあります。こうした強みに合わせた設備投資も行い、生産最適化を進めていきます。これまでスターが手掛けてきた牧草関連の中・小型機械は、本州や九州の畜産エリアでの販売実績が多く、輸送コストや納期などを考慮し、これらの生産拠点を松本工場に移管し始めています。

一方、海外向けの製品には、これまで以上に力を入れていきます。海外展開としては中国に関連会社の上海スターがあり、牧草関連の機械を輸出し現地で組み立て販売を行っています。さらに上海を足掛かりに東南アジアへの進出も見据えています。アジア諸国でも農業の集約化は進んでいるのですが、やはり日本と似たところがあり、規模的にも中型・小型の農業機械が求められる場面は多いのです。日本製の使いやすく壊れにくい機械への期待と信頼は根強くあります。

SHIBAURA



2018 FIFA ワールドカップロシア大会で活躍
乗用 4 輪 3 連リールモア SR370



中型カッティングロールペーラ TCR2240AN

技術の核となるのは ICT 化と無人化

国内では、数軒～数十軒の規模で企業体を作って、マーケティングをはじめとしたビジネスの観点をもちつつ経営する農業が増えてきました。また、特定のスーパーやコンビニと組むことで、フードサプライのバリューチェーンにしっかり入り込み、収益を伸ばす事業も増えています。国内のこうした構造変化と先に述べたアジア諸国への進出も踏まえ、これからの農業機械では、ICT 化と無人化が技術の核となるはずだ。

例えば、就職先として農業企業体に加わる人が増えている昨今、機械に慣れていない、いわば素人でも操作しやすい機械が必要です。また、長年の経験で培った“カン”もありませんから、最適なデータに基づいて自動で施肥をしてくれる機械など、少ない人数でも田畑を管理できる自動システムも求められるでしょう。

私たちの強みは、これまでの農家の方々のお付き合いからデータ化されていない情報をたくさんもっていることです。牧草を作って何十年という方には自動センサは必要ありません。しかし ICT 化や無人化には、暗黙知を形式知にひも解いたうえで基礎データとすることこそが求められています。これらを活かすことで、現在の農業構造、食の安全保障のニーズにミートする、キラリと光る技術や製品を生み出していきたいと考えております。

私個人は、千歳、松本、そして IHI 本社のある東京の豊洲を飛び回るような生活が続きますが、二つの会社の先人たちに学びつつ、^{まいしん}全社員とともにお客さまにより良い製品を届けるために邁進してまいります。